

日本の「大学」が薄まっている。

頭脳を集め、育成するべき場所なのに、学生も教授陣も、学びの質も、へ希薄化Vした。「社会のニーズに応えていない」「学位に見合った能力を持つ学生を出していない」「国際競争力が低い」。大学に対して渦巻く批判だ。

何より、自ら変わろうという意識が薄い。

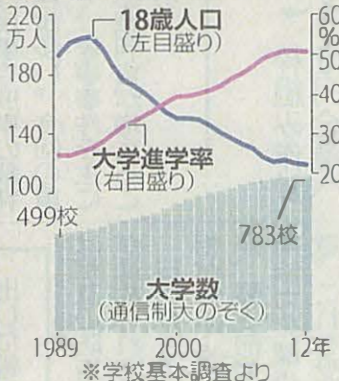
*

東京大学は昨年、浜田純一学長の主導で、学年の始まりを世界の主流に合わせた「秋入学」構想を打ち出した。各国の大学との入学時のズレをなくし、意欲ある学生や研究者の行き来を活発にして教育、研究を国際化しよう。構想は、東大が先導すれば一気に他大学にも広がると思われたが、すぐ暗礁に乗り上げた。



頭脳 4

改革敬遠 「薄まる」大学



「政府も応援してくれないし、他大学もついてこない。学内さえ反対がある」(東大幹部)。国家試験日程との調整など、秋入学で生じる様々な面倒ごとへの懸念が足を引っ張った。構想は結局、「春入学、秋始業」という中途半端な形に軌道修正された。

大学も、大学生も、粗製乱造されている。希望者は学費を払えばどこかの大学に入学できる大学全入時代だ。卒業審査も甘い。もはや大学すべてを「学問の府」とは呼べず、淘汰や役割分担は避けられない。生き残るのは、どのような大学だろう。

秋田市にある国際教養大学。その図書館は365日24時間開いていて学生の姿が絶えない。勉強強くないと、英語で行う少人数授業についていけないからだ。4年で卒業できる学生は約半数という厳しさだが、卒業生への企業の評価は旧帝大と肩を並べる。トップダウンの手法に加え、自治体の出資もあり実現できたもので、学生の数を確保しなければ財政的に苦しい大学には、まねは出来ない。

*

既存の大学は、変革が必要と知りながらも、安泰を保証された幹部や教授ほど変化を敬遠しがちだ。教育の改善、出口(卒業)管理の強化……。中央教育審議会などが20年以上前から提言してきた改革案は一部しか実現していない。

「ずっと同じ議論をしている。問題点は分かっているのに、変える場合は一律にやろう、と考えるから動かない」。文部科学省幹部は自嘲気味に言う。

文科省は昨年、「社会変化に対応できない大学の退場」や国立大の役割分担を盛り込んだ「大学改革実行プラン」を公表した。来年までに集中して実行するとスピード感を強調したが、個々の大学がどう変わるのかは現時点でも不透明だ。

地球規模で若い知性が交流する時代に、日本の大学は、ふさわしい役割を果たせるのだろうか。弛緩した高等教育を蘇らせるには何が必要か。国立大学長の経験もある中嶋嶺雄・国際教養大学長と、数学者で国立情報学研究所の新井紀子教授に処方箋を問う。

A portrait of a middle-aged man with glasses, wearing a dark suit, white shirt, and a patterned tie. He is looking directly at the camera with a slight smile. The background is blurred, showing warm, out-of-focus lights.

専門を超え総合的に考え発信できる力をつけようとしているが、日本では大学院教育が法科や教員養成などに特化される一方、学部のカリキュラムが空洞化した。語学力を含めた教養教育は、人格形成に欠かせない。学部で教養を醸成した上で、大学院や企業で専門的知識を身に着ければよい。

学生にはもっと勉強させないといけない。国際教養大の授業は少人数制ですべ

Nippon 蘇れ

1面の続き

私の処方箋

なか じま みね お
中嶋 嶺雄

国際教養大学長

国際教養大（秋田市）理事長兼学長。専門は国際社会学。東京外語大学長のほかカリフォルニア大サンディエゴ校の大学院など海外大の客員教授も歴任。76歳。



て英語、1年間の留学や留
学生との共同生活を義務付
けている。猛勉強が必要だ
が、みな壁を乗り越え、チャ
レンジ精神や個性を磨く。
2004年の開校以来、卒
業生の就職率はほぼ100
%で、いわゆる一流企業も
多い。教育への評価と思う。
卒業要件も厳格にしたの
で、4年で卒業できる学生
は約半分だが、卒業が半年
や1年遅れても、教養と学

力を身に着けていれば企業は採用してくれる。出口で学生の学力を保証するのが高等教育機関の責務だ。

教員の意識を変え、質を高めることも重要だ。日本では教員が厳しい評価を受

ける機会がまだ少なく、年功序列の中で甘えが出てしまった。学生に真剣に向き合わず、十年一日のごとく同じテキストで同じような講義をしているケースも少なくない。国際教養大では、

けた人もいた。既存の大学での大胆な改革は難しいとは思うが、日本の大学は国際社会で後れを取っている。今改革をしなければ、その差はますます開いていくだろう。

- 語学力含め教養教育は必須
- 教員の意識を変え質を高めよ

3年任期の年俸制を採用した。高い評価を受ければ報酬は上がるが、基準を満たさないと再契約はない。

学生の教員評価も重視している。私自身、カリフォルニア大サンディエゴ校の大学院で教べんをとった際に初めて学生評価を受けた。本気で学ぶ学生の目は



秋入学“後退”

東京大学は昨年1月、浜田純一学長の主導で、学部生の入学時期を全面的に秋に移行させる構想を打ち出した。海外で圧倒的に多い入学時期に合わせて国際化を進める一方、入試は春のままにし、4月からの半年間を、社会貢献活動や短期留学などにあててもらう期間とした。だが、学内で慎重意見が相次ぎ、入学時期は春のまま9月に始業する案に“後退”。2014年度の導入を目指し学内で検討中だ。

日本の「強み」見極め改革

大学改革は喫緊の課題だが、単に欧米大学の「コピー」では、日本の大学が持つ知的文化や技術などのリソース（資源）が失われかねない。授業がすべて英語の国際教養大では、秋田の伝統や武士道精神も教える。大学については、社会も偏差値など国内でしか通じない価値観を重視し変革を求めなかった面もある。大学、国は日本の「強み」を見極め、財政面でも国民の理解を得る努力をすべきだ。（社会部 朝来野祥子）